

新聞記事 一九六五年五月（発行元不明）

学力テストとは何か

能力は、はかれぬ

“人間不在”教育に反省を

矢口 新

先日、文部省学力テストのはじまる数日前、ある小学校の先生に会った時の話であるが、その先生の学校が学力テストの実施校にあたったので、学校中ノイローゼ気味で、毎日準備をしているという話を聞いた。ふだんはなかなかしつかりした先生であったが、その時は全く迷いの中にあるといった様子だった。私は日本人のテスト過敏症をまざまざと見せつけられた思いであった。

薄い限界への認識

学力テストの準備をするなど

ということとは全くお話にもならないことなのだが、日本では県の教育委員会が先に立ってそういうことをするのである。どうしてそういうことになるのかといえ、きわめて単純なことである。テストというのは、現在生徒がどういう状態にあるからどこに手を加えてやったらよいかを発見するものであり、それは将来の予測をしたり、人の進路を決定したり、人間を評価したりすることはできないものだということがわかっていないからである。情けない話だが、教育当局者でもそういう認識がき

わめて薄い。

本当の意味がわかって、時々テストを受けてどこをどう勉強したらよいかを反省する材料に使うということになれば、よろこばれるはずのものである。しかしそこに行くには大変な努力がいる。

日本人のテスト観をつくっているのは入学試験である。入学試験でバカの程度を判定されてお前はこの学校に入れないといわれたら、飯の食い上げになると考えられている。また一面ではそうなっている。みんながそう考えているから、学歴主義になる。学校を出たかどうかが大事で、能力をみるなどということとは余り考えないし、そういう努力もしない。勢い、学校を出ること、したがって入学すること、これが一生を決めることになる。入学試験が一生を決めることになれば、ノイローゼにならざるを得まい。

「学力」はみていない

テストにそんな力がないということはちよつと考える人ならすぐわかるはずなのである。専門家の間では、今のペーパーテストは余りにも制約が多すぎるということとは常識である。ほんのちよつとしたことをみているだけであつて、「学力」などというものをみているのではない。

だからそういう点では、能研テストをもって入学試験にかえるなどといってもだめである。能研テストと入学試験の間に何程の差もありはしない。どだい無理なことなのである。能力を見極めて、どんな勉強をしたらよいかを決めてやるなら、それは教育そのものの中で教師が行うことなのである。テストでやるべきことではない。

テストが実際に教育を支配しているといわれる。中学校も、高等学校もテストのために教育（いな、非教育）をやっている。

能研テスト一本ヤリになれば、それを突破するために、一切が動員されることになる。主要四教科などという奇妙な言葉が生まれて、テストがそれについて行われるように、それをめぐって教育界は動き出す。そしてテスト準備のための、教育ならざる教育が行われる。つまり「テストを殺せ」というより仕方がないのである。テストはやめるべきである。

「テスト主義」を殺せ

人間の能力はテストでははかれない。今のテストでは特にそうである。能力ははかるものでなく、育てるべきものである。それは一人一人個性があつて、実に多様なものである。それをのばすことを考えるべきであつて、今のようなテストでそれをはかつて、人間の評価をしたり、将来を決めようとするのは、人間の冒とくである。

昔、高等学校に、指導教官制

というのがあつて、時々教官は生徒を家へよんだりして、個人的に指導してくれた。そうして一人一人を愛して、いろいろアドバイスしてくれたものである。人間を育てるといふことはこういうことであろう。今の教育はテスト主義によつて、教師は知識の切売りをしており、テストをして、冷酷な点をつける。これで人間が育てられると思つたら大きな間違いである。

中学校や高等学校は、怠学少年をつくる場所だとさえいわれている。それは全く、テスト主義の教育のなせるわざであるといつてよい。人間不在の教育なのである。

筆者は最近産業界や自衛隊の中に入ってくる中学卒、高校卒の素質検査（これは中学三年程度のテストであるが）の段階が、平均四十点位であるという事実をつかんでいる。あれ程テストに熱心であつて、結局、実際社会でテストしたら四十点、しか

も高校卒が中学校三年程度のテストでそうだといふのだから、今の教育は何をしているのかわからない。全く、テストを殺せである。
(教育評論家)